生命の奉仕

レイチェル・ナオミ・リーメン

「いかに援助できるか」という問いは、近年多くの人々にとって意味あるものとなった。しかし、もっと深い問いがあるのではないか。おそらく本当の問いは「いかに援助できるか」ではなく「いかに奉仕できるか」なのだろう。

奉仕は援助とは異なる。援助は不平等に基づいており、対等な関係ではない。援助するというのは、自分の強さで自分より弱い人を助けるということだ。助ける時に自分の中で起きていることに注意を向けると、私はいつも自分ほど強くない人、自分よりも助けを必要としている人を援助していることに気づく。人々はこの不平等を感じる。私たちは手助けをする時不注意にも、人々に与える以上のものを奪ってしまうかもしれない。彼らの自尊心や充足感を削いでしまうかもしれないのだ。私は助ける時、自分自身の強さをとても意識している。一方、私たちは自分の力で奉仕するのではなく、自分自身の存在を持って奉仕する。自分の経験すべてから引き出すのである。私たちの限界が奉仕し、私たちの傷が奉仕し、私たちの闇さえも奉仕することができる。私たちの完全性が他者の完全性、そして生命の完全性に奉仕する。あなたの完全性は私の完全性と同じだ。奉仕とは対等な関係である。

援助は負債を生む。あなたが誰かを助ける時、彼らはあなたに借りがある。しかし、奉仕は癒しと同様に相互のものだ。借りはない。私は自分が奉仕している人と同じように、奉仕されている。援助すると満足感を覚える。奉仕すると感謝の気持ちが起きる。これらはまったく異なるものだ。

奉仕することは、治すこととも違う。私が誰かを治そうとする時、その人が壊れていると認識し、その壊れ具合によって行動する必要がある。治す時は、相手を完全な人間として見ることも、その人のに宿る生命の完全性を信頼することもない。奉仕する時は、そうした完全性を見て信頼する。それに応えて共に働く。

私たちと私たちが治している物や人との間には、距離がある。治すことは判定の一形態である。すべての判定は、距離、断絶、違いの体験を生み出す。治すことにはたやすく道徳的な距離となり得る、専門知識の不平等がある。一方、距離を置いて奉仕することはできない。自分と深くつながっているもの、自分が喜んで触れようとするものにだけ、奉仕できる。これがマザー・テレサの基本的なメッセージである。私たちが生命に奉仕するのは、それが壊れているからではなく、聖なるものだからだ。

助けることが強さの経験なら、治すことは熟練と専門知識の経験である。一方、奉仕は神秘、降伏、畏敬の経験だ。治す者は、因果関係があるように錯覚する。奉仕する者は、より偉大なもの、本質的に未知のものへの奉仕のために使われていると知っていて、それを厭わない。治すことや助けることはとても個人的なことである。とても特殊、明快かつ具体的だ。私たちは一生の間にさまざまなものを治したり助けたりするが、奉仕する時はいつも同じものに奉仕している。これまでの歴史を通じて奉仕してきた人は皆、同じことに奉仕してきた。私たちは完全で神秘的な生命の奉仕者なのだ。

もちろん肝心なのは、奉仕せずに治したり援助できるが、治したり援助せずに奉仕することもできる、という点だ。治すことや援助はしばしばエゴの仕事であり、奉仕は魂の仕事である、とまで言い切れると思う。外から見ると似たものに見えるかもしれないが、内なる体験は異なる。結果もしばしば異なるものだ。

奉仕は自分にも相手にも役立つ。私たちを使うものが、私たちを強くしてくれる。治すことや援助は時間が経つにつれて消耗し、枯渇する。時間の経過とともに、私たちは燃え尽きてしまう。一方、奉仕とは新たな供給である。私たちが奉仕する時、その仕事が私たちを支えてくれる。

生命の本質は尊いものであり、生命とは未知の目的を持つ聖なる神秘である、という大前提の上に、奉仕は成り立っている。奉仕する時、私たちは自分が生命とその目的に属していることを知る。基本的に、助ける、治す、奉仕することとは、人生を見る方法である。助ける時は生命を弱いものと見なし、治す時は生命を壊れているものと見なす。一方、奉仕する時は生命を完全なものとして見る。奉仕という観点から見れば、私たちはすべてつながっている。 すべての苦しみは自分の苦しみであり、すべての喜びは自分の喜びである。奉仕の衝動は、このような見方から自然と必然的に生まれてくる。

最後になるが、治したり助けることは治療の基本ではあるものの、癒しの基本ではない。慢性病を患って40年、私は多くの人に助けられ、私の完全性を認めない多くの人に治してもらった。そのように治されたり助けられることで、私は重要かつ根本的な面で傷ついてしまった。奉仕のみが癒してくれるのだ。

© 1996 Rachel Naomi Remen, Noetic Sciences Review, Spring 1996
source: http://www.rachelremen.com/service.html

リーメン博士はカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）医学部庭家庭・地域医療科の臨床教授であり、最近US News & World Report誌に取り上げられた革新的なUCSFのコース The Healer's Art のディレクター。10年前に設立された新卒医師のための専門能力開発プログラム Institute for the Study of Health and Illness の創設者兼ディレクターでもある。ニューヨーク・タイムズ紙ベストセラー Kitchen Table Wisdom（邦題『失われた物語を求めて：キッチン・テーブルの知恵』）を著し、最新の著書 My Grandfather's Blessings: Stories of Strength, Refuge and Belonging は全米ベストセラーとなっている。優れた物語の語り手、また講演家として全米で何千人もの人々に語りかけ、自分の人間性の力と人生を使って社会に変化をもたらせることを、思い出させてきた。クローン病を患って48年になるリーメン博士の活動は、医師と患者の視点の融合から生まれたユニークなものである。